

1. サハリン（出穂）

Q. (高原) 森林の変化について。サハリンのステージ3と1が、トウヒが出てくるタイガで、2が明るいタイガになるのではないか。ステージ2のところのサハリンではグイマツが出てくる。

A. 細かなデータをもう少しそろえて整理したい。

Q. レジユメの「共通するパターン」とは、なにが共通しているのか？地域性のことではなく？

A. 森林と動物相と石器群のあいだの共通性です。

Q. サハリンと北海道で動物相は異なるのか？

A. LGMということでは同じ。

Q. 石器が移り変わるのは狩猟対象が変わるからか？

A. 台形様から細石刃に変わるのは環境が変わったから、とは考えていない。もともと台形様を使っていた人々と、細石刃を使っていた人々がいて、気候が変化したときに細石刃を使っていた人々が来たと考えている。

Q(出穂). 資源としてみたとき、現在の暗いタイガより資源が豊富だったということがあるのか？暗いタイガが発達したときの遺跡はほとんど見つからないので、遺跡のほうからは状況がよく分からない。

Q(池谷). 絶滅という指標はなにか？どのスケールの範囲でサハリンをとるかで議論が変わってくるのでは。南サハリンと北との差をどう考えるか。

A. 化石があるかどうか。北海道では更新世の動物化石が全部あわせても20点ほどしかない。今あるデータを並べるとどうなるかをやっている。

2. 北海道（児島、小杉、三浦）

Q. (飯沼) 漁獲高の変化のグラフをどう理解すればよいか？

A. そもそもニシンは回遊魚で漁獲量に変動が激しい。海流の変化も考える必要がある。1860年代に右肩上がりになるのは乾燥させて粕にする。そのとき薪の使用の関連で捉えている。網の問題など技術的な問題のほかに売り先の問題もある。

コメント（以下C）. 1819年代からデータ化できるような資料があるのがすごい。

Q. (安部) 魚つき林は持続的な利用を可能にするところに意義がある。増えた分を捕ってしまうのではなく、漁獲量を制限することはあったのか？海洋資源を枯渇させないという意図で魚つき林を植えたのか？

A. 漁期を限るとか操業に出る船の数を制限する、などは漁協レベルや村での漁師の決まりなどがあったが、ニシン漁についてはなかった。

C. (湯本) ニシンの量の変動を理解するのは複雑で、漁師と行政で言い分がちがう。「思想的に」とあったところが重要で、「木を伐らないほうがいいんだ」というロジックのために魚つき林がつかわれている。

Q. (白水) 北海道はよそ者が多数入ってくるが、地のもののアイヌと比較することで分かることはないか？資料的には難しいかもしれないが、近世末期の紀行文などでアイヌ民族の生活誌に触れて、伝承などに関する記録をみることはできるのではないか。

もうひとつ、近代に入ってから保護・育成の考え方について。高橋美貴さんが自然保護思想の広がりのことをやっている。施策が北海道にどのように反映されたか？

A. (児島) 資源に対するアイヌの思想については資料がないが、口承文芸のなかに資源に対する考え方が出てくる可能性がある。たとえば資源を獲ってしまうと獲った人にカムイからバチが当たる、という話になる。そういう個人的な話をどう解釈したらいいかという問題がある。

2点目について。近代になるとヨーロッパ流の施策が取り入れられるが、魚つきに関してはヨーロッパの影響はなく日本独自の政策のようだ。たとえばスイスで森林法ができるのは日本より後。

Q. (白水) 漁獲制限についての政策はどうか。新潟県ではヨーロッパの当時の自然保護思想をかなり直

接的に受けた政策があって、漁獲の直接制限などをした例がある。

A. ニシン以外の魚種に関しては漁獲制限などいろいろある。とくにサケ・マスに関しては養殖に絡んで河川法と森林法ともうひとつ、三法がセットになって動いている。

3. 東北（池谷）

生態と知識と行動の3つをみながら、本当の知識の束を探っていく。安溪さんが言っていた渡辺仁さんはそれを全部やっていた。近代の歴史論だとそういう資料はなかなか残っていない。生態調査は厳しい、行動調査も厳しい。記録として獣害と、いなくなったという事実がある。

A. 遠野盆地 近世の八戸のあたりには猪と狼に関係があった。

Q. (湯本) 狼は家畜のイヌとどれだけ区別ができるのが問題。狼神社にはぶちの狼の絵もあって、イヌだろうな、というものがある。

A. 狼に牛や馬が殺された、という資料が牧場などにあるので、そこからは分かる。

C. (児島) 新冠で狼による馬の被害をなくすのにどうすればいいか、という議論がされてきたが、狼でなく野犬が含まれていたことが分かっている。

(湯本) 自然交雑はある。

(安溪遊) 対馬の事例で、役人の記録をみた。猪も鹿もいなくなったのでこれはいいと思って焼畑をやるようになったが、あとで制限が必要になった。

(池谷) 時間軸を押さえる必要がある。ヨーロッパでは熊を絶滅させたが今ルーマニアから入れたりしている。今回東北地方で評価がどう変わっていったかをローカルなレベルでみていけば、ダイナミックなレベルでの賢明な利用か、が追える。

Q. (安部) 賢明な利用の定義として、獣害と狩猟圧というふたつのキーワードから考える。絶滅はアンワイズと考える。としてあるが、なぜそれが定義になるのか？賢明な利用というのであれば、利用と狩猟圧との関係で後者が上回らないようにしよう、という定義ならわかるが、獣害に着目するのはなぜか？

A. 害獣駆除というかたちで狩猟圧が加わった。それは行政サイドだけでなくかつてセットであった。獣害に関する資料なら多い。歴史上のことなので。

Q. (飯沼) 獣害というのは農業への害という視点でしか見ていない。獣を獲って利用する人の側の視点が抜けている。一方の視点ばかりが突出しているのではないか。

A. 資料を見つけてそういう視点からもやりたい。

C. (松田) 2 ページの湯本さんのいう定義と今の話がずれている。獣害が発生していてもいいけど絶滅させていない、というのは2ページの定義だと賢明な利用にあたる。文献からは現に絶滅させている。そういう失敗のほうが証拠としては歴然とある。

Q. 獣害が意識されやすくなるような土地利用の変化もあるのではないか。北上だと馬の放牧がさかんだったのが畑にされるようになって、それまで獣害でなかったのが獣害とされるようになったのではないか。

A. どの要素を年表に入れていくかによってぜんぜん違ってくる。

C(安溪遊). ~害、といわれるものの登場、は重要。

4. 中部（白水、関戸）

Q(児島). 御巢鷹山をまもることは森林の利用か鷹のひなを持続的にとることか、どちらにつながるか。賢明な利用ということであれば、御巢鷹山はどこが賢明か？

A. 白水) 巢鷹がとれることが巢守にとっては重要。周りの人も入って利用していた形跡はある。地元の人がちょこちょこ入って燃料材をとることは行っていた。「巢鷹山として守られた」のは基本的には巢守の意向であって、秋山に住んでる人たちが自分の山を守ったわけではない。

Q(児島). 賢明な利用＝持続可能な利用とみればよいのか？

(湯本) いろんな人の思惑があるなかで、自然をどういうふうに使分けをするのか、という構造が見えたらいいと思っている。

(安溪遊) 何かの尺度であてはめて「100点」とするのがいいことではない。持続可能を金科玉条にしているがいろんな見方があるので争論を取り上げたのはいい視点だと思う。いろいろなコンフリクトが起こってどれが賢い利用なのかの戦いとその帰結が分かるなら、小地域でやっていることの意義がある。

(白水) 新潟の人が御巢鷹山で枯れていた木を板にしたのが巢守に見つかって怒られた、という例がある。巢守にとっては一木一草とてはいけないところだが、新潟の人たちはトチの実を普段拾っていたので自分たちの領土だと思っていた。

Q(佐久間). 伐ったものを返せ、金で返せ、という話にはならないのか。

A. 巢守にとっては伐られないことが重要だから、伐ってしまうとどうにもならない。

5. 近畿 (佐久間、奥)

Q.(中井) ケーススタディのなかで疑問を感じたことが一点。湖西地域は商品経済が発展したところだが丹後はそうではない。近畿が近畿として扱わなくてはいけないのは、「どこまでも金にまみれた土地だ」という話だと思う。そここのところを押すと、話がつながるのではないか。

A. (佐久間) 都市との関連が深いところと独立性が高い地域を比較しながら見ていこうとしている。

Q.(松田) 鋸を導入して資源が保たれたわけではないのだから、ワイズユースではないのではないか？

A. 自然保護ベースでのワイズユースだとたしかに該当しないが、～

Q. 鋸のほうはワイズユースの事例とはちがうのではないか。少なくとも2ページに書いてある湯本さんの見解とはちがう。

C. いろんなものを利用したのがワイズユースになる、ということがおもしろい。こういうオプションを開発する、ということもワイズユースに含めて、ワイズユース2として、区別しながら話す議論の構造がちがってくる。

Q.(安部) マルチカルチャーに向かった理由がよくわからなかった。競争に勝つような付加価値のある商品を生み出す、ことだけに特化しなかったのはなぜか。

A. ソラマメ、寒天などは村単位での特殊商品になってブランドのとりあいのようになる。

6. 九州 (飯沼)

Q.(高原) 先日椎葉にボーリングに行った時に阿蘇を通ったのですが、あそこはカシワが多いですね。今のお話に出てくるナラの木に興味を持ちました。檜と言っているのはカシワのことかな、と思いました。

A. 文章には檜と書いていて、神様が日本にもってきて種をまいてそれが現在の檜の林だと書いてある。ケヤキは建物につかう、檜は神事に使う。檜は伐採に大変厳しく制限を加えて、侍の場合は所領を没収すると書いてある。

Q(池谷) 火の利用の場合、勢子とイヌで追うことは知られている。犬が仕留めの部分にくる。その神事が天正になくなった理由は？

A. 秀吉によって阿蘇家最後の当主が切腹させられて断絶する。熊本全域から勢子を3000人ほど集めて、小国から焼いて集める、火で大規模に追うということが書いてあって、集落が十分に形成できないほどだった。

30日

8:30～

7. 奄美・沖縄 (安溪)

[議論のために] レジユメ P2 賢明な利用＝持続可能な再生天然資源利用 はわかりやすい。

しかし、 なくなっただけでわかるオゾン層のありがたさ ←フロン利用が賢明でないとわからなかった。
神として過去を裁くことは無理っぽい、おこがましい。

8. 古生態班 (高原)

Q. 7000 年から 8000 年前に火事が世界的にみられるというのは、どういう事例があるか？

A. ヨーロッパ・アメリカでもある。乾燥してないと火事がそう簡単には起こらない。先日の国際第四紀学会のセッションでも火事の事例報告が多数あった。モデルで考えるとどういう条件で火災が起こるかということを考えて実際のデータと照らし合わせる作業が進んでいる。

Q. (飯沼) 炭とソバは人間の活動が関わっているとわかるが、キビ族 (連) はどうか？

A. 花粉ではわからないのでプラントオパール分析を進めている。

9. 栽培植物 (山根)

Q (高原) . 日本の自生のワサビの DNA の多様性は分かっているか？

A. 今調べています。

10. マルハナバチ (須賀)

C(大住). 人為だけではつながらないところがいくつかある。東日本の大型の採草地と西日本の採草地はちがう。それをつなげるにはもう少し工夫が必要。

11. ミツバチ (高橋)

Q (湯本) . ミツバチの単為生殖って普通にみられるのか？あまり聞いたことのない話だが。

A. 今まではあまり知られていなかった。

12. 保全 (松田)

Q. (村上) 屋久島に今年登ったら頂上にちかいところに親子の鹿がいて草を食べていたが、大丈夫か？

A. 中腹に比べれば頂上は草が少なかった。島全体で食害がひどくなったのは林道に昔は犬がいたけどいまはなくて、アクセスがよくなったため。知床では 300m 以上は今のところは鹿はいないが、ほっておけばだんだん増えてくる。

(休憩)

地域班へのコメント (湯本)

サハリン班：私自身大型動物の絶滅には非常に興味を持っていて、このプロジェクトにサハリン班がいてよかったと心底思っている。旧石器時代の絶滅と東北班が今やっている絶滅と両方をみていきたい。
北海道班：地のもよそもの議論でいうと、北海道はよそもの宝庫で持続的な利用はなかつたろうという話に先日の会議のときになった。京都精華大の小椋先生も北海道のことに興味を持っている。

「バチがあたる」というのがリアルな世界に安溪さんも私も住んでいた。いろんな昔話で、個人的にバチがあたることしかないんですね、と児島さんがおっしゃったが、私たちはそのことをとてもリアルに感じる。もうひとつ、アイヌの昔話も採取してから 100 年以上経っているが、採取される昔話がどういふふうに変わっているかにも興味がある。研究者がどういふふうな関心をアイヌの人に持っていたかが表れると思うので、そのあたりも調べていただくとありがたい。

東北班：コンパクトにやっていて、冊子もきちんとまとめている。

中部班：地域はコンパクトにやっていて、自然の変化が非常にはっきり出ている。人間のなかのコンフリクトがどう自然をつくっているかに興味がある。

近畿班：いろいろやっているが、中井さんが昨日おっしゃっていたように「金まみれ」とういか里山利用が経済的インセンティブのもとに展開した。柚の地図ができていたが、タットマンの本（『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書館 1998）に書かれていることをもっと深めていけるとよい。

九州班：天正以降どうやって草原にしたのか。（入会地） 今日の須賀さんの話につながってくる。二次遷移のはじまりの草原 北海道の道東には自然草原か半自然かわからないところが多い。

奄美・沖縄班：海と山の話絡めてしているところが他の班にない特徴で、期待している。

辻野発表をうけて

（湯本）再生と非再生の中間に、非常に時間のかかる大径材がある。もうひとつ、ジュゴンなど再生力が小さいものも鹿などとはちがう。大型獣は気候に特化したから、と昨日おっしゃっていたが、私は絶滅人類説によっていて、大型獣は子供を産むまでの年齢がかかるという点で半再生といえる。

（安溪遊）考えていること、言っていること、していることはみんなばらばらなので、言説に惑わされてよくわからない。たとえば日本政府がどこにいくらお金をかけているかを見ると、なにをしているかわかる。それが evidence base ではないかと考えている。

（湯本）生きている方のことを学問でみているひとは「賢明な利用」といいが、書かれたものをみている文献史学の方は疑っている、ということが印象に残っている。

（安溪遊）考えていることを直接知るのとは不可能。

（松田）資源は有限、と書いているが、無限なものは資源といわない。非森林も利用するものとしての資源。いま自然を守るといっている人は「生態系サービス」という概念を出す。それに類するものに価値を認める場合にあつて資源の持続的な利用が成り立つものではないか。もう一つは、ワイズユース（以下 WU）というのは、決して賢く利用しようとする人が自覚しているかどうかは関係ないと僕は思っている。結果的に持続可能性に効いているということは昔からあつた。そういう観点のものを WU と言っているかどうかはわからないが、それを検証することが大切。

（安溪遊）ケニアから定期的にバチ当たりの話が送られてくる。規則を破って大変なめにあつた昆虫学者の話など。

（飯沼）WU のそういう話は絶対にある。支配者が支配のためにやっていることが WU だったりする。安溪先生の話も江戸時代の話も藩が木を切らなかつたり、魚つき林の話もそう。生活の中でどうしてもこれをしないと、という話がある。中世では殺生禁断とか放生とかいう話がある。それがいいものを殺すとか、海であれば湾内の魚を獲る制限を日数や場に応じて加える。阿蘇でも放生をやっている。それは社会のシステムであつて結果を見ると WU になっている。そういうことが今までの議論の中ではできていない。

（安溪遊）インドで肉を食べなくなった経緯を復元している本がある。バラモンは肉を食べていたが、これだと取り合いになったときに自分たちの特権を保持できず社会が崩壊するだろう、という予測のために肉を食べないということに切り替えた。だからインドではあれだけの人口が共存できるシステムができた、という話がある。タブーを支配者が意図的に設定することがあつた。

（湯本）バードサンクチュアリも、日本では支配者が自分で狩をするために作ったのがはじめ。

（安溪遊）高知ではヒヨドリ 100 羽か 1000 羽に一羽毒がある。保護するために考えた。

（白水）メンタリティーのことでいうと、日本では狩猟に対する抵抗感がつよい。宗教レベルの要素が非常に大きいのではないかと。中部班には狩猟のことをやっている人がいて、領主のことを殺生人と呼ぶ。国王・天皇の行う狩猟についても整理をしている。古代～中世初期にかけては自らもやっているが、野獣から鳥中心に狩猟の対象動物がかわっていく。在地の猟師自身も自分の罪を仏教の中で軽くする方法を考え出す。日本の動物との関係ではそういうのが大きい要素になる。そういう面をもうすこし意識的に考えたほうがいい。

（安溪遊）奄美・沖縄は例外で、ブタを飼っていても狩猟していても普通のこと。特別なことではない。

(飯沼) 日本では武士はやっぱり人を殺す・獲物を獲る。それをどううまく切り抜けるか。阿蘇では仏教に関する要素がすっぱり抜けていた。仏教的に論理のなかに組み立てて、論理を作り出す。巖島も神様が殺生を引き受けてくれる。巖島にもってくれば猟師が許される、という構造をうまく作り出している。とんでもない逆転の発想で論理を組み立てている。殺生を社会の中でうまく組み立てながら動かしていくシステムが存在している。今までは地域的にみてきたが思わなかったが今回 WU というふうにみるとそういうことを位置づける必要があるのを感じる。

(p) 自然の魂に感謝する、というのはあるか？

(飯沼) それはありますよ。なんとか塚は全国各地にある。猟師がそういうことをやる。針塚とかもそうだし日本人はなんでも供養の対象にする。諏訪だけは幕府も禁制をしたときに認めていた。幕府が公認するから諏訪では贅を行う。阿蘇と同じ。幕府が政策としてそういうことをやってすり抜けている。マルハナバチの話もつながってくる。

(松田) 国連が生態系サービスと呼んではじめて価値を意識しているものが、昔からどう守られてきたかという意識でみている。国連はそういう言葉を使わないと守れない。その対比を見極めていけばわかる。

(飯沼) 宗教に対するアプローチが今のところ全体的に不足している。

(安溪遊) たたりの話も含めて。

(飯沼) すり抜けの論理をつくるところがしたたか。われわれが自然保護とかいうことを、昔の人たちは、かつてはタブーでうまく守っていた。近代は法を作らないといけなくなって、法を作ると恐れがなくなって、タブーとしてはなくなった。

(松田) かつてはそういうことをいいながら斜に構える価値観を共有していたからうまくいった。生態系サービス、自然が人間にサービスする。経済学者はなんでも価値にしないといけないから。

(湯本) 〈生態系機能と生態系サービスの説明〉

(松田) 財としての価値よりも文化的価値のほうが大きい、ということですね。

(安溪貴) 縄文杉のことも？

(松田) あれがなくなっても洪水が起こるわけではない。

(湯本) 矢原さんにわたしがこういう研究をしたい、という構想をはじめて話したとき、「たたりの研究をしましょう」といわれた。

(児島) 具体的に、意図しているかどうかは別として結果として持続可能な利用になっている例を明らかにして、宗教とか民俗的な習慣とか、何がそれに作用しているか見ていこう、という話ですか？

(湯本) 共通的に話ができるのはそういうところかな。

(児島) 結果として持続可能な利用に絞ってそういう例をいろんな地域であきらかにしましょう。それにはいろんなものが作用している。そういう作用も分野ごとに明らかにしましょう、という話ですかね。

(湯本) 二つある。ひとつは人と自然との相互作用環をどう理解するか。阿蘇や長野に草原がある、なんでだ？前は放牧場、今は観光、そのまえは採草地だった、というふうに考えていける。いまの自然をどう理解するか、花粉分析や古文書など他の方法で現象面を理解するのも一つの方法。

それだけでは底が浅いので、それを作り出してきた人間の頭のほうを考えてみたい、という二重構造を明らかにしたい。今の自然とそれを作り出してきた人の意図や思いを考えたい。それは生態学者だけでは絶対にできないのでいろんな分野の人とやりたい。

(安溪遊) 日本においては建築業者や冠婚葬祭業者は大安仏滅のカレンダーに沿って行動している。それはなぜかということの説明した。今では予測不可能なときに「これはあのせいだ」といわれないようにしている。

(白水) 今まで意識化するのは難しいがさっきのワサビの話にでたように、「自分の代で変えたくない」という意識はものすごく多い。社会的経済的に合理的には説明できないが、その意識が支えてきた部分が多い。富士山の北麓に 11 か村の広大な共有林がある。7 割が自衛隊の演習場になっているが江戸時

代には採草地として生活に欠かせない場所だった。今でも組合という形で共有林組合になっている。そこから講演を頼まれたが、その理由が、合併すると組合が消えてしまうかもしれないから、共有林を見直して価値付けをしたい、というものだった。そこは江戸時代には採草地、かなり毎年広大に野焼きをしていた。明治になって国有地になってそのあと恩賜林として下されて米軍に行って自衛隊に行って、という変遷を経ている。現在は採草地としては使っていないが毎年火入れをしている。恩賜林組合を維持するための象徴的な儀礼として火入れをしている。人間が価値付けをかえていく。もともとは生活に必要な採草地、結局現代では共有林を維持する。今では人間の知恵としてのコモンズの現場で、そういう自然状態を守ることがいい、だから変えたくない。という意見がある。後付で価値のほうをかえていく。手段のためには目的を選ばない。そういうことは日本の歴史上あるのではないか。

(安溪遊) わかりやすい例だと、たとえば私は共有林のメンバーで神社の世話人になった。マツタケの収入が激減する中で合理化を図って春夏の祭りを減らそうという案がでたが、わたしの代のときにやめたくないという感覚があった。明治時代からの入札文書を預かっていて、それを見ながら考えると、「あの人の代のときに行事が半分になった」というのは私の感覚としてはまずい。先例をつくるな、という教えが沖縄にある。宮古の伝承があって、以来300年ひとつも吸盤の欠けていないタコを出す家と、お米をもっていく家がある。

鳥取の大山で梨を作っている家にいたとき、業者が捨てた端材でつくった机の話になった。「あとは野となれ山となれ、では先祖に申し訳がないですからな」という意識があるから赤字であろうと続けなといけない、となる。だからこそ日本の小農はとっくになくなっているもおかしくないのに続けている。

(白水) 田舎のじいちゃんばあちゃんが今も畑を作っているのは、畑を維持するためにしている。作ったものを採らずに野菜がそのまま放置されていることも多い。ある意味環境を維持するために作り続けている、というのはすごくよく聞く話。

(安溪遊) もちろん、戦争のときに町にいた家族が帰ってきて食べても食えるように、という安全保障の意味があったという話も聞く。

(湯本) 恩賜の共有林にも安全保障的な意味あいがあった。用心山という言葉もある。

(飯沼) 今の議論は歴史学者としてはよくわかるけれども、阿蘇の例であれば、そこの利用がどんどん変わっている。草原を焼いた、狩をするためだった。そのあと焼畑を考えたかもしれない。出来上がった景観を次に何か利用しようとするときに何かを考えた。最後にはそういう景観が長く続いてきたから観光に利用しよう、とか自衛隊が利用する、ということになる。WUというのか分からないが、自衛隊も火を入れて演習地として維持している。その時代の適応とか、つくられた景観がうまく選択された結果、マルハナバチが生き残ってきた。長いスパンで考えると、田んぼを作ってきた歴史は非常に短い。そうやって結果として適応性を選んできたのは意図があったわけではなく「ここはいいな」くらいの意識でやった。

(湯本) 今となってはWUなんですよ。屋久島では縄文杉は使い物にならない木が残ったわけです。今は加工技術も運搬技術もあるので全部きろうか、という話にもなったが、せつかく今まで残ってきたから観光に使える、という事例もある。これまでのWUでなくこれからのWUを考えることがより重要。

(大住) 過去を意図したかどうかは別として、結果としてWUになった、ということのほかにも実際壊れてしまって、積極的なWUもある。里山の入会的なものが昔からあったものとは思えない。中世の仕組みが崩れる中で何か起きて、「これではだめだ」というところを経てWUができてきた。そういうところを見ていけたらと思う。明治にどんどんそういうのが解体された。里山がどういうふうにできてきたかがぼくはぜんぜんわからない。

(湯本) 九州班から「弥生になって水田ができたのはWUですか?」と言われて困ったことがある。近世になって困難なところにも田んぼを作って、耕すのが大変だから一番早く消えていくのにそれを維持することが今やWUになっている。

(今村) 湯本さんからの「これからの WU」というキーワードが出てきたので、次のステップを考えてもいいのではないかと。もうひとつのキーワードとしては仮に「未来可能性」か。その話をできたらなと思う。

(湯本) 昨日も言った「未来可能性」は「持続可能性」とはちがう。

(山根) こういう問題点がある、ということが分かって、どうすればいいか私も迷っているが、持続してきたものが断絶していく現場にいま直面しているなかで、具体的にどうすればいいかを知りたいし、いろいろな知恵を出してほしい。

(安溪遊) そういう気持ちは非常に重要だ。地元の人に怒られたり。

(湯本) だからすぐに解決をとというわけではないが、「5年間ときどき来てた地球研って何やったっけ？」といわれなように、地元の方との対話の場を設けていただくように各班をお願いしたい。

この研究所は政策提言するところではない、といわれているが、私のところはそうとも思っていない。松田さん・矢原さんは実践的に再生事業もやっている。

(安溪遊) 個別の細かい話がたくさんある。それをまとめて、そのまとめを「今の立場からみるとこう見えるけどそれは偉そうな立場だよ」と。今のわたしたちからみてどういう解釈がありうるか、という気持ちを持っておくのは悪いことではない。

(白水) 個別の事例はたくさん出ているが、どこかに共通性、共通のパターンがあるんじゃないかと思う。意識としての共通性があるのではないかと。「意識性の法則化」はあまりやられていない。たとえばこのプロジェクトが直接の政策提言ではないが、今までやられていないことを出すときに、環境に対する意識性の話、どういう意識でそういうことをやろうとしたか、自然環境に対する意識性を抽出して法則化・明確化して提示することがあれば、今後いろんなところに応用できるし警鐘を鳴らす根拠になる。そういうことが重要。

(湯本) パターン化することは必要。

(飯沼) この話とこの話はつながる、というのはたくさん出てきたから、それは湯本さんのほうで整理したらいい。「未来可能性」は今の段階では出さないほうがいい。2年の成果でいうのはおこがましい。今はまだ試行錯誤をして、だからこそ次にいかなくはないといけない、という話になるほうがいい。だから12月は整理をして補えるところは補う。「これだけの課題が残っているからあと3年やらないといけない」という話になる。

(安溪遊) 今の人たちからみて過去のいろんなことを調べるときに、研究という営みの未来可能性については十分考えていますよ、ということを書いておくといい。

(湯本) わたしはみなさんのやっていることをだいたい知っている。今回はみなさんによそがやっていることを、12月の前に知ってもらおうのが狙いだったわけです。

安部：まとめ

WUの対象 個人・社会、倫理・規範の根拠、たたり・タブーなど

公的政策・法制・経済システム →合目的性・合理性

規範と合目的性・合理性との間に interaction

・・・これが短期目標

12月の発表会でこの方向性でまとめるなり、このスキームに沿って発表するために足りないことを埋めていくための土台になる。

長期目標は「未来可能性」の話になる。ひとことでいうと、各班がみてきた「WUの対象を保全することが正しい」といかに言えるか、保存の論拠・保守主義の論拠に尽きる。

われわれが最低やるべきは、how よりも why。そこが一番の眼目になる。

Q(安溪遊) 保守主義というのは守らなくてはならない美しいものを守ることか？

(湯本) 前半の話はボトムダウン・トップダウンの話とはちがう？

(安部) interactionがあるから、そうは言いたくなかった。

(湯本) 入れ子構造にもなっている。

(須賀) 今の見取り図はわかりやすい。長期目標と短期目標の間をどうつなげるかを考えたとき、過去と現在とでは情報の流通する範囲やガバナンスの範囲も変わってくる。ローカルな風習とどうつながってくるか、というところに短期目標がある、ということですね。

(安溪遊) 規範は上から与えられることもある。先住民族の価値観に共通性が多い、というのは人類がもともと持っていた共通の基盤を特定の文明がなくしている、というほうが理解しやすい。

(白水) 規範や法制というのは、御巢鷹山みたいに上からの押し付けもあるが、多くは在地の論理を支配者が追認した。逆にそれは支配ということの本質にも関わる。在地の論理を組み上げていくことが支配。それがまさしく両者の関係ということになる。

(安溪) 植民地支配のなかで範囲が大きくなって慣習に矛盾が生じると調整していく、というのはアフリカにもよくあった。

(飯沼) 全体で日本列島における自然と人間とくっっているわけだから、空間的にある地域から流通とかによって広がっていく。狭いところの問題が広がっていく。今はグローバルになっていく。そういう広がり軸とか時間軸の問題をどう入れればいいのか、それによってWUの考え方も大きく変わる。そこがどういうふうに全体として組み込めるのか整理できるかが一番大きな問題。この年表でも大きな問題だ。

(湯本) 最初の2年はこれでいいと思っていて、日本全体のガバナンスという枠組みを3年目から作ろうと思っている。燃料革命とよく言うが、化石燃料に依存する生活に移行するのが入ってくるし、地租改正も大きな問題で、在地の論理をぶっ飛ばしたところがある。それへの反発も全国的に起こってくる。

(安部) 短期目標を長期目標につなげるときに、世俗化をどう考えるかが大きな問題だと今のわたしは思っている。脱宗教化した現代では、たたりの話は通じない。

(安溪遊) 沖縄はそうではない。

(安部) そこへ説得するロジックをどう作っていくかが難しい。

(飯沼) いまも結構タブーは成り立っている。

(松田) 「科学化」ではないんですよね？

(湯本) ここで決めなくてはいけないことがひとつあります。全体会議の進め方について。

みなさん個別にはおもしろい研究をされているが、なかなかそういう話ができないのが事実。だから口頭発表とポスター発表を分けるのはどうかという意見が出ている。個別のおもしろい研究が埋もれてしまわずにどうなっているかを知るためには工夫がいる。

(安溪遊) 各班10枚までとか制限はありますか？ 台紙は準備しておいてもらえるでしょうか。

(湯本) 口頭発表は前回とおなじく各班ごとに割り振ろうと思います。共通課題は基本的には環境の変遷とそれを支えた考え方です。それに尽きます。それ以上は、ブレークダウンはできないでしょう。植物地理や古生態は、チームのまとまったもので結構です。

(高原) 生物地理と古生態と、これまで共同でシンポをやったりしたし、今日のワサビの話があったように各地でいろんな利用がある。遺伝的な多様性のデータがあるかとお聞きしたのは、古生態でこういう気候のときにワサビがどういう分布をして、という話につながってくる可能性がある。草原の話も。われわれは単にバックグラウンドを提示するだけでなく、生物地理や各地域ともつながりのある話ができると思う。

(湯本) 古生態と植物地理で一緒にやったとき、明らかに分布の変な境界線があって、明らかに人為だろうという仮説になった。そういうところで工夫していただければと思う。

基本的には今回の話をもう少し足りないところを足していただければいいと思う。そのところで12月の地球研の発表会にはわたしが何か考えてやるしかない。未来可能性のほうは時期尚早だとは思っている。そういう志はあるが。

(松田) 未来可能性はほかのプロジェクトではどれくらい取り組んでいるのか？

(湯本) (地球研の改革状況を説明、10月1日から開始する)

文化や言語の多様性がなぜ大事かは、なかなか難しいところがある。それを考えざるを得ない立場になった。そういうことはよそのチームは全然やっていない。

地球研は世の中にメッセージを出さないといけないが、今までの軸では分かりにくくてメッセージを発しにくかった。「多様性はなぜ大事か」ということを明確に発信できるようになる。

(高原) 未来可能性について。その未来はどのくらい未来なのか？10年先ならもう考えないといけないし、そんな短い話ではないと思うが、古生態の仕事をやっているところと古いところは何十万年、過去のところも時間スケールをだんだん短くして今回の話に近いところに近づけつつある。これからの話も温暖化問題であれば100年先、古生態からいえば1万年、2万年先も考えないといけない。それくらいのバックグラウンドを見据えて物を考えないといけない。

(湯本) 気候は予測しやすいが人間社会はどうなるかわからない。100年先のことを考えても無駄だと思っている。せいぜい30年か。

(高原) 人間社会のいろんなあり方、これから予測されている大きな環境変動に対して動植物が大きく変わっていく中で、今日の話が先々に通じるのかを考えないといけない。生態系のルールがぜんぜんちがってきてしまう。

(湯本) 30年先、100年先と2、3段構えでしょうね。

(松田) 未来可能性は予測のことも入っている？ 30年後くらいまでの目標を決めるということ？ 30年くらい持てばいい、という考え方ではないですよね。

(湯本) いや予測というよりも目標設定。バックキャスト(目標を設定してそれを実現するためには何をしたらいいか)という意味で考えている。

(飯沼) 地元の人への公開ということも、安溪さんや白水さんはやってきている。入っていた地域で、われわれが何のためにそういうことをしているか、という機会を設けて話をしていないと。現実の世界のなかで、地元に入ってみる。役に立つかどうかはわからないが、そういうことを自覚しておく必要がある。マルハナバチの話をしてもらうことで、すごくよく分かるようになった。

(湯本) 後半においてはそういうことをぜひ積極的に考えましょう。

(児島) HPはどうなっていますか？

(湯本) まだ出していないデータもあるでしょうし。

(飯沼) どのへんで出したらいいか。

(辻野) 業績関係のやつだったらどんどん言っていたらいい。

(湯本) それは12月の全体合宿までの宿題にさせて下さい。こちらで何ができるかということも含めて考えておきます。

(児島) 今回の資料と東北班の報告書はほかのメンバーにも送られますか？

(湯本) 東北班の報告書は池谷さんしか持っていない。

(安溪遊) 池谷さんに頼んでPDFに落としてもらえるといい。

(湯本) 追加の資料のファイルも地球研に送っていただいて、それも含めてPDFファイルにしてみなさんに送ります。12月も今回の延長戦だから、みなさんにも読んでおいてもらってそれを参考に新しい要旨集を作ってもらおう。今回の議事録も全員に送りましょう。そういうことは班を通さずに直接地球研から送ります。

では、長いことどうもありがとうございました。

(終了)